

第12講 「能動分詞」と素直に言いましょうよ

「動詞」の「活用」のひとつに「～ing」がありまして、現象として、「動名詞」「現在分詞（進行形）」「分詞構文」と従来いわれております

この「動名詞」「進行形」「分詞構文」の3種の関係について、たまたま同じ形をしていると勘違いしている方や、同じ形であることについて、考えもしなかったり、目をつぶっていたり、目を逸らして逃げている方がほとんどだと思われます

「たまたま同じ形」だというなら、「不定詞」も「名形副」の各用法が「たまたま同じ形」だといきましょうよ（いってくださいよ）（100年以上、そう教えてきたんですよ）

無思慮なり、目をつぶり、逸らしている方々には、「現象」を「観察」し、「抽象化」「論理公式化」し、「上位概念」で結ぼうという「論理的思考」「科学的思考」「帰納的思考」「体系的思考」に薄い乏しいということになってますよといわざるを得ません

世界・日本を背負う未来のあるみなさんは、これからは、このような「論理的思考」「科学的思考」「帰納的思考」「体系的思考」ができるように努力し習慣化しましょう

さて、実体ですが、≪「動詞」には、「～ing」という「活用」があり、『文。』全体を「名形副化」させ、それぞれ「能動事物」「能動状態」「能動状況」を示し、次の新たな高度な大きな『文。』の中で活躍させていく≫ということなのです

そうすると、「不定詞」と全くといっていいほど同じ作用をしているのです

ただ、慣用的な違いや、意味や用法に微妙な違い（例えば、「～ing」が「経験的・過去の」で「to do」が「未来的」といわれています）があるだけで、基本的な「文法論理」や「利用法」にはほとんど違いがありません

主に、「他動詞」の「目的名句」での採否と、両者で意味が異なる場合が重要です

また、『文。』まるごとの「節」化とは違いますが、「軽量的」ながら、「節」に近い面もあるので、「（能動分詞由来）準名節」「（能動分詞由来）準形容節」「（能動分詞由来）準副節」と呼ぶべきものでしょう（「不定詞」と区別する必要から、「活用能動準名節」「活用能動準形容節」「活用能動準副節」と称すべきものです）

「準副節」というものは、従来「分詞構文」として説明されてきましたが、「分詞構文」という名称では、「副詞」的かつ「準節」的な実体が明らかになりませんね

そもそも、「現在分詞」という、「現在」の意味すらない、実体とは乖離した名称までいただいていた、理解を困難にしています（そんな名称が100年以上存続しているとは・・・）

「動詞」の「～ing」という「活用」は、「能動的」な「名形副化」に過ぎませんので、本書では、「能動分詞」と呼びます（「分詞」という命名は納得できますね）

「不定詞」と同じだとすれば、ほとんど説明のしようもありませんが、「屋上屋を架す」ようなことをさせていただきます（この時点で「主語」の扱いに関心が及んでいますか）
ただ、技術的な細かい点に注意するだけです

「名詞化」の場合

例文でみてみましょう

He helps other people .

→ his helping other people

My son helps other people .

→ my son's helping other people

「helping other people」と『文。』の形態をおおよそ保ったままでいながらの、『文。』全体の「名詞化」ですから、「主語・主体・動作主」は、「名詞化」された「全体物」に付加された「所有格」としてあらわれます

そして、『文。』全体が「名詞化」されたのですから、次の新たなる大きな『文。』の「主目補」や「成句詞」の「後属役」になっていけるのです

一般には「動名詞」と呼ばれていますが、「単語」に注目しただけの矮小的呼称です

「所有格」としてあらわれた「動作主」が、次の新たなる『文。』の「主体・主語」と一致していれば、次の「my」のように、表記する必要はなく、省略されます

I like (my) playing tennis .

一致していなければ、表記されます

I like their playing tennis .

ちなみに、この「their」は、「like」の「目的役」であることをうけてか、「them」も用いられます（「成句詞」の「後属役」の場合も同様です）

「活用準名節同格」、「同格のo f」

第07講で学習した「名節同格」を、簡略化した「活用名節」の利用による軽量の「転換形」であり、「同格のo f」ともいわれています
この「同格のo f」の後ろに「所有格＋能動分詞による活用名節」を置きます（「能動活用名節同格」というべきでしょうか）

「先行する名語句」＋「o f」＋「所有格＋能動分詞による活用名節」（～という・・・）

They know the news that he killed her .
他動詞 名目的語 = 同格名節

「名語句」＋「同格節」全体で「目的部」
「～という知らせ」

では、「that 同格名節」を「能動分詞」の利用により簡略化します

They know the news of his killing her .
他動詞 名目的語 = 能動分詞準名節同格

「名語句」＋「o f」＋「同格句」全体で「目的部」
「～という知らせ」

いずれも、「The news is that he killed her .」というような「元の『文。』」があり、「that名節」を「補役」とする『文。』が由来である『『文。』の名詞化」です（それが、さらなる大きな次の『文』の「know」の「目的役」となっているのです）（「第07講」の「名節同格」参照）

なお、「不定詞」による「同格」（「第11講」参照）にも留意してください

これまでで、おおよそ『『文。』の名詞化」が出そろいましたので以下にまとめておきます（これはかなり重要な考え方をまとめたものなので、認識のうえに再認識です）

『文。』の「名詞化」	
① 「名節」（「第07講」参照）	⇒ 『文。』 まるごと
② 「不定詞」（「第11講」参照）	⇒ 「動詞」の活用・転換、『文。』の軽量的転用（準節）
③ 「能動分詞」→「本講」	⇒ 「動詞」の活用・転換、『文。』の軽量的転用（活用節）
④ 「名詞構文」（「第06講」参照）	⇒ 「品詞」の転換による、『文。』の変換

「形容詞化」の場合

「形容詞化」の場合は、常に、①「名詞修飾」の場合と、②「形容補役」の場合に分けて考えるのが原則ですね

そして、「形容詞化」の場合、「動作主」をあらわすことはなく、①「名詞修飾」の場合、「能動分詞」1語であれば「名詞」の前に置き、2語以上で副詞を伴っていれば、「名詞」の後ろにおきます（「能分名修」と略します）

a man helping other people

「形容詞化」の場合は、「関係代名詞」の「主格」と同様に、『文。』の「主体名語句」を説明する役割を担うのですから、「主体」を別に表記できるはずありません

②「形容補役」の場合は、「自動詞」の次に「補役」としておかれて、「主役・主体」の「状態」をあらわしますね（「能分形補」と略します）（主体は常に一致します）

He is helping other people .

ここで、お気づきでしょう

これは、「進行形」といわれているやつですよ

でも、文法的な概念としては、≪「自動詞」＋「形容補役」≫なんですね

本書では、英語長『文。』を読めるようにするということを主眼にしています
長『文。』を読むには、「純論理的文法的処理」を前提とした「論理的な一文の解釈」を経た、『文。』と『文。』のつながりや「段落」の要旨や「文章」全体の主張を読み取る「論理的文脈解釈」しか必要ありません（「作文者」の「真意」のつかみ取りです）
「読者・解答者」の「感情・感傷」をきいてはいません

「カルチャー講座」とは異なり、「入試」での「古文」「漢文」「詩」「短歌」「俳句」等でも同様で、これらの読解で要求されているのは、社会一般人の常識的感覚に基づいた「論理的解釈」であって、「解答者」の「感情・感想」を聞いてはいません

ましてや、「入試」の「現代文読解」や「英文読解」では、当然「論理的文脈解釈」しか要求されていません

どうあれ、単なる「感覚的」「情緒的」なものは、持ち込んではならないのです

「大学」や「社会」のような「公的場面」で要求されているのは、「論理に基づいた常識的思考過程」「常識論理的結論」と「その論理的理由」です

決して、「なんとなくそう感じた」であってはならないのです

とすれば、本論に戻りまして、「進行形」というのは、進行しているように思えるという「感覚的情緒的な感想（思い込み）」にすぎず、「論理的」「文法的」なものではないのです（そもそも進行とは、相当高度な哲学的概念で、西田先生に教えを乞うべき問題ではないでしょうか）

「形容詞」であらわされる「状態」というものは、ある程度の一定期間は継続しているものでして、それを「進行している」というのは、「文法論理」を離れた、「評価」や「感想（感覚的な受け取り）」「感覚」の問題なのではないでしょうか

「能動分詞」の「形容補役」を、通称として「進行形」と呼ぶのは勝手なのでしょうが、それは、「感覚的」「情緒的」「通俗的」なもので、ことの本質や原理をいいあてるものではなく、「非論理的」で、「論理的思考」が停止してしまい、先に進めないことを「覚悟」しなければならないでしょう（それが長年全国で蔓延しているとは驚異！）

現に、従来、≪「b e 助動詞」＋「現在分詞（本動詞）」≫というような「不可解」な「非論理」的な「思い込み」「眉唾公式」に陥っているのです

「動詞」が活用すれば、「品詞転換」が起こるのは言語の常識であり、ましてや「b e 助動詞」（辞書参照）なんて、常軌を逸しているのです

同じ「～ing」が、①「名詞修飾」のときは「形容詞」で、②「補役」のときは、「動詞」であるというような考え方が、「論理的」といえるのでしょうか
複雑な分類をして意味があるのでしょうか（「論理」とは、可能な限り「簡明」「簡便」でなければならないはずというか、自然と「簡素」となるのです）

すなわち、「能動分詞」により『文。』が「形容詞化」された場合も、『文。』の「動詞」に着目した「能動分詞」による「名形副化」の「一形態」にすぎませんし、また、例えば、「名詞化」で言えば、「h e l p」が「h e l p i n g」になったというような、「単語」だけに注目しても、上述の例文の「h i s」や「o t h e r p e o p l e」の「論理的説明」もつけられず、『動名詞』には、「主目補になれる名詞的側面」と「目的語や補語や副詞に従える動詞的側面」の二重の性質がある』というような「現象結果をひたすら追いかけて羅列する」という「微細的思考（ミクロ）」で満足し、≪『文。』全体として「名形副化」されている≫というような「巨視的（マクロ）」「全体的」「総合的」な「抽象化」「上位概念化」はできないのです

しつこく繰り返しますが、「大学」や「社会」のような「公的場面」で要求されているものは、「論理的な思考やモノ」「結論提示と論理的理由」「問題解決と思考過程」であって、「感覚的」「情緒的」なものは、「私裏的」な場面でしか通用しないのです

「感覚的」「情緒的」なものでは、「流される」「ほだされる」ことはあっても、「合理的」「説得的」「公的」ではないのです

「副詞化」の場合

「副詞化」の場合は、一般的には「分詞構文」と無（意）味乾燥に呼ばれています
「動作主」をあらわす必要があれば、「主格」であらわします

「主格」という点からすると、「副詞化」の場合は、「副節」に近いイメージがかなり強いのではないかと考えられます

本書では、「分詞の副詞的用法」「分詞準副節」として、第14講で学習します

能動分詞（現在分詞）のまとめ

能動分詞 (現在分詞)	用 法	役 割
	名詞的用法	「主目補」になる (動名詞)
	形容詞的用法	①名詞修飾 ②補役(進行形)
	副詞的用法	場面状況の設定 (役外状況族) (分詞構文)

「動詞の活用」に着目した『文。』の「名形副化」のまとめ

	名詞化	形容詞化	副詞化
不定詞	不定詞(準)名節	不定詞(準)形容節	不定詞(準)副節
能動分詞	活用(能動)(準)名節 (動名詞)	活用(能動)(準)形容節 (進行形)	活用(能動)(準)副節 (分詞構文)
受動分詞	—	活用(受動)(準)形容節	活用(受動)(準)副節 (分詞構文)

次講では、「受動態(受動分詞)」と「完了態(完了分詞)」の本質に迫ります